

第4学年国語科学習指導案

指導者

平成30年11月29日(木) 5校時

第4学年(男子14名 女子15名 計29名)

単元名 語ろう・広げよう ごんぎつねの世界

「ごんぎつね」新美 南吉 (東京書籍 新しい国語 四年下)

【考え・基礎知識】

叙述を基に登場人物の気持ちを想像しながら読むことができる。

【つながり】

行動や会話、情景描写など複数の場面の叙述を関連付けて登場人物の気持ちの変化を捉えたり、その要因について考えたりする。

【応用・ひろがり】

身に付けた読みの力を使って、続き話を創作したり、他の作品を読んで登場人物の気持ちの変化を想像したりする。

1 単元設定の理由

○ 単元について

本単元は、小学校学習指導要領国語編第3学年及び第4学年の「C読むこと」の指導事項「ウ 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと。」及び、「オ 文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと。」を受けて設定したものである。

教材文「ごんぎつね」は、いたずら好きのひとりぼっちの小ぎつねのごんと、母の死によってごんと同じくひとりぼっちになってしまった兵十が登場する物語である。自分のいたずらのために兵十のおっかあを死なせてしまったと考えたごんは、後悔しつぐないを行う。しかし、そのつぐないも兵十に理解されないうまま、最終的には兵十にうたれてしまうという切ない心のすれ違いを描いた物語である。

この物語は、時や場所が具体的に書かれており、児童にとって構成を捉えやすい教材である。また、いたずらばかりしていたごんが、二章を境に同じ境遇の兵十へ親近感を募らせ、償いを続けるごんの気持ちが大きく変わっていくことを捉えやすい教材である。さらに、登場人物の独話や心内語、優れた情景描写がふんだんに盛り込まれ、それらを関連付けながらより深く登場人物の心情を捉えていくのに適した教材であると考えられる。

○ 児童について

本学級の児童は、一学期に「走れ」で、中心人物の気持ちの変化を考えながら読む学習を行った。児童は、中心人物の気持ちが大きく変化する場面を見付けたり、どのように変化したかを考えたりすることはできたが、なぜその変化が起きたのかなどの因果関係について考えることは難しく、自力で捉えられた児童はほとんどいなかった。そこで、大きく変化した部分の近くにある叙述に注目するだけでなく、複数の場面の叙述と叙述を関連付けながら変化の要因を考えていく指導を行ってきた。

また、事前のレディネステストでは、次のような結果であった。

① 登場人物の行動から気持ちを想像して読んでいる。	92%
② 登場人物の気持ちの変化を捉えて読んでいる。	88%
③ 登場人物の気持ちがなぜ変化したのかについて読んでいる。	76%
④ 登場人物の気持ちが情景描写に表れていることを捉えて読んでいる。	16%

これらの結果から、ほとんどの児童が、登場人物の行動からどのような気持ちが表れているかについて

想像しながら読むことができていると分かった。また、始めと終わりの変化した気持ちについても、ほとんどの児童が読むことができていると分かった。さらに、一学期の学習を生かし、気持ちの変化の要因を捉えられつつあることも分かった。しかし、登場人物の気持ちを、状況や景色、様子などを表す情景描写と結び付けて捉えることができている児童は少ないことが分かった。

○ 指導について

指導にあたっては、主体的な学習とするために、ごんぎつねの作者になったつもりで続き話を創作し、紹介するという「語ろう・広げよう ごんぎつねの世界」を学習のゴールとして設定する。物語の文脈を理解した上で登場人物のその後の行動や会話を想像することにより、登場人物の心情の理解を深めていくようにする。そのために、物語の世界を外から見て登場人物の行動や考えに対して評価していく「ごんに手紙を書く活動」を毎時間の言語活動として設定していく。

ごんに強い共感をもつ児童が、ごんに語りかけるように手紙を書くことによって、叙述を基に文章中に書かれていない登場人物の心情も想像し、それらに関連付け根拠を挙げながら自分の解釈や考えを表現できるようにする。その際、複数の場面の行動や会話と心情を結び付けたり、さらには、情景描写と心情と結び付けたりする学習を行うことにより、より深く登場人物の心情を理解させる。

学力向上フォローアップ校重点取組の中学年の具体的取組内容である「読み取ったことを基に話したり聞いたりしながら意見を述べ合う活動」では、第1時に初読の感想を交流し、登場人物の行動や表現に対する疑問を話し合うことで、単元全体を貫く中心となる学習課題を全員で検討し、決定していく。その際、「なぜ」を大切にし、因果関係について考える時間を十分確保していく。単元全体を貫く中心となる学習課題を解決することが、学習のゴールである続き話を創作することにもつながることを意識させ、目的をもって教材文を読ませるようにする。

そして、協働学習の場を設定し、自分の解釈を積極的に話し合わせることで、自分の考えはどうか、友だちの考えと似ている点や違う点はどこなのかなどの比較をさせ、自分の考えを振り返る場とする。また、話し合ったことで考えが変容していったことが視覚的に分かるようなノート指導を工夫する。これらによって、それぞれの考えや感じ方には違いがあり、他者と話し合っただけでよかった、もっと話したいという思いを児童にもたせ、国語の学習に対する意欲を向上させていきたい。

★ 学力の課題（要因）と考えられる手立て

	学力の課題（要因）	考えられる手立て
A	<ul style="list-style-type: none"> ○ 一斉音読では、どこを読んでいるのか分からなくなり、一定の速度で音読することが苦手である。 ○ 登場人物の気持ちを想像することが苦手である。 ○ 場面ごとに読む学習ではない場合、関連のない部分を読んでいる事がある。 ○ 自分の考えがまとまらず、書いたり交流したりすることに課題がある。また、主述のねじれがあり、何について書いているのか分からなくなることがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆ 教科書のどこを読んでいるかを指で押さえながら読ませる。また、事前に範読を聞かせ、言葉のまとまりを意識させる。 ☆ キーワードを示したり、そこから連想されることを複数書き出したりしながら、登場人物の気持ちについて想像を膨らませやすいようにする。 ☆ 学習の早い段階であらすじを押さえ、「○○について考えるときは、どの場面に注目したらいい？」と投げかけ、関連する場面に注目させる。 ☆ 書き出しを示したり、穴埋めのできるワークシートを使用したりしながら考えをまとめさせ、自信をもって話合いに参加できるようにする。

B	<ul style="list-style-type: none"> ○ 直近の叙述ばかりに注目し、複数の叙述を関連付けて読むことができない。 ○ 自分の考えを話すことに抵抗がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆ 「ほかにも似たようなところはなかった?」「理由は一つではないよ。」などと投げかけ、考えがまとまってももう一度教材文全体を見るようにさせる。 ☆ 似ている考えがあれば「同じです」と言って付け加えて話すなど、ペアやグループでの話合いの方法を指導し、交流する意味を理解させる。また、教師の見取りによってB児の考えを全体に出すことで、自信をもたせる。
C	<ul style="list-style-type: none"> ○ 書くことには抵抗がないが、叙述を意識せず、空想していることがある。 ○ 誰の行動や会話なのかを勘違いして捉えていることがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ☆ 「どの言葉からそう考えたの?」と常に聞き返し、叙述を根拠にして考えをまとめさせるようにする。 ☆ 物語を読むときには、時、場、登場人物だけでなく、人物の性格や人物同士の関係など、設定を丁寧に押さえる。また、色別にサイドラインを引いて、誰の行動や会話なのかを区別しやすいようにする。

指導のポイント ～昭和北中学校区 「学びの変革」アクション・プラン～

★ 育成したい資質・能力に関わって

- 自分の考えをしっかりとらせてから話し合わせるようにすることで、一人一人が自信をもち進んで発言できるようにする。
- 自分と友だちの考えを比較させ、感じ方の違いに気付いたり、自分や友だちの考えのよさに気付いたりできるようにすることで、学ぶ意欲を高める。

★ 協働学習に関わって

- ペア対話では、自分の考えと友だちの考えを区別して書かせることで、交流することによって自分の考えがよりよく変容していくことを実感させる。

2 単元の目標

- 進んで物語を読み、自分の考えや思ったことを話し合ったり手紙に書いたりする。
〔国語への関心・意欲・態度〕
- 複数の場面の叙述を結び付けながら登場人物の気持ちの変化について捉えることができる。
〔読むこと ウ〕
- どの叙述に基づいているかを明らかにしながら互いに感じたことや考えたことを発表し合い、それぞれのよさに気付くことができる。
〔読むこと オ〕
- 言葉には、考えたことや思ったことを表す働きがあることに気付いている。
〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(1)イ(ア)〕

3 単元の計画

次	時	学習活動	評 価				
			関	読	言	評価規準	評価方法
一	1	○「語ろう・広げよう ごんぎつねの世界」という学習のゴールを知る。 ○心に残ったことを中心に初読の感想を書き、交流する。	○			<ul style="list-style-type: none"> ・学習のゴールを理解し、見通しをもって学習しようとしている。 ・物語に興味をもち、ごんや兵十の行動や会話などの叙述に着目しながら読んでいる。 	ワークシート 発言
	2	○初読の感想を交流し、中心となる課題を設定する。			○	<ul style="list-style-type: none"> ・場面の様子や優れた表現に着目し、言葉の使い方について理解している。 	ノート 発言
二	3	○ごんの人物像について話し合い、いたずらするごんの気持ちについて考え、ごんへの手紙を書く。		○		<ul style="list-style-type: none"> ・叙述を基にごんの設定を読み取り、その境遇からごんがいたずらする気持ちについて考え、ごんの気持ちに共感しながらごんに手紙を書いている。 	ノート 発言 手紙
	4	○ごんが兵十に栗や松茸を持って行く理由について考え、ごんへの手紙を書く。		○		<ul style="list-style-type: none"> ・叙述を基にごんのつぐないの理由について考え、兵十の寂しさに共感するごんの気持ちを想像し、ごんに手紙を書いている。 	ノート 発言 手紙
	5	○ごんは兵十に気付いてほしい気持ちがあるのかについて考え、ごんへの手紙を書く。		○		<ul style="list-style-type: none"> ・叙述を基に期待から落胆に変わるごんの気持ちの変化について考え、それでも兵十に近づきたいごんの気持ちを想像し、ごんに手紙を書いている。 	ノート 発言 手紙
	6	○この物語は、兵十とごんにとって納得のいく結果となったのかについて考え、ごんへの手紙を書く。(本時)		○		<ul style="list-style-type: none"> ・ごんをうってしまった兵十と気付いてもらえたごんの気持ちについて考え、ごんに手紙を書いている。 	ノート 発言 手紙
	7	○この物語が悲しい結末になった理由について考え、ごんへの手紙を書く。		○		<ul style="list-style-type: none"> ・人物同士の関係を捉え、悲劇が生まれる理由について考え、ごんに手紙を書いている。 	ノート 発言 手紙
三	8 9	○学習したことを基に、続きがどうなるかを考えて話を創作する。 ○考えた続き話を発表し合い、感想を交流する。	○	○		<ul style="list-style-type: none"> ・最後の場面のごんと兵十の心のつながりを考えながら、続き話を書いている。 ・続き話を発表し合い、感想や意見を交流することで、互いの考えや表現のよさに気付いている。 	続き話 ノート 発言

4 本時の目標

- この物語は、兵十とごんにとって納得のいく結果となったのかについて叙述を関連させながら考え、話し合ったことを基にごんへの手紙を書くことができる。〔読むこと ウ〕

5 本時の流れ（6時間目／全9時間）

学習活動	予想される児童の反応	指導上の留意点（◇） 学力の課題（要因）に対する手立て（◆）	評価規準 〔観点〕 (評価方法)
1 本時のめあてを確認する。		◇ ごんは、兵十に撃たれて死んでしまったことを確認する。	
この物語の結末は、ごんと兵十にとってなっとくのいくものだったのだろうか。			
2 最後の場面を音読する。		◇ ごんや兵十の気持ちを考えながら音読させる。	
3 兵十にとってこの結末は納得できるものであったのかについて話し合う。 ・グループ対話(★) → 全体対話(☆)	<p>(○の意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> 「こないだ、うなぎをぬすみやがったあのごんぎつねめが、またいたずらをして来たな。」→兵十がごんを憎んでいることが分かる。 「ようし。」→ごんを火縄銃で撃とうとしていることが分かる。 <p>(×の意見)</p> <ul style="list-style-type: none"> 「ごん、おまえだったのか。いつも、くりをくれたのがごんだと分かって驚いている様子が分かる。 「兵十は、火なわじゅうをばたりと、取り落としました。」→なんということをしてしまったのかという後悔している様子が分かる。 	<p>◇ どの児童も自分の考えを明確にしてから対話できるようにするため、あらかじめ自分の考えをノートに書かせておく。</p> <p>◇ 対話の目的を明確にし、互いの考えを納得いくまで聞き合うようにさせる。また、考えだけでなく理由や根拠になった叙述も交流させることで、それぞれの考えの妥当性について話し合うようにさせる。</p> <p>◆ 「ぬすみやがった」「ごんぎつねめ」「しのばせて」など、兵十の言動を具体的に示し、そこから兵十の気持ちを想像させる。(A, B, C)</p> <p>◆ 読者としてではなく、兵十やごんなど主語をはっきりさせてから考えさせるようにする。また、色別のサイドラインにより、誰の言動かを確認してから考えさせる。(C)</p> <p>◆ 似ている考えを付け加えたり、新たな考えを取り入れたりさせるなど、対話によって自分の考えをよりはっきりさせ、自信をもたせるようにする。(A, B)</p>	
4 ごんにとってこの結末は納得できるものであったのかについて話し合う。 ・グループ対話(★) → 全体対話(☆)	<p>「ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなぎきました。」</p> <p>(○の意見)「うれしい」</p> <ul style="list-style-type: none"> やっと兵十に気付いてもらえてよかった。 「ごん」と呼んでくれた。 神様じゃなくて、ぼくだって分かってもらった。 うなぎのこと、ゆるして。 <p>(×の意見)「悲しい」「残念」「寂しい」</p> <ul style="list-style-type: none"> もっと早く分かってほしかった。死んでしまったらもうつぐなえない。 兵十はまたひとりぼっちになってしまう。 	<p>◇ グループで対話するときは、自分の考えと友だちの考えを区別して書かせるようにし、自分の考えが変容したり深まったりしていくことが視覚的に分かるようにする。</p> <p>◆ うなぎいた後、ごんは何を言いたかったのかを考えさせることで、4, 5場面とつなげてごんの気持ちを想像させる。(A, B, C)</p> <p>◇ ×の意見に偏った場合、死んでしまったらこれまでのごんの行動はすべて意味がなかったのかと問いかけ、「兵十に近づきたかった」という5場面までのごんの気持ちを思い出させる。</p> <p>◇ 全体対話によって、ごんは、分かってもらえたうれしさ、悲しみや寂しさなどいろいろな思いをもっていることに気付かせる。</p> <p>◇ 最後の一文の情景描写によって、二人のすれ違いの悲しさについて気付かせる。</p>	

<p>5 その後の兵十の行動について想像する。</p> <p>6 本時の学習のまとめをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ごんのお墓をつくった ・ごんのお葬式をした ・ごんのことを話した 	<p>◇ 最初の文章へ戻り、ごんのことを語り継がれていくイメージをもたせるとともに、「語ろう 広げよう ごんぎつねの世界」の続き話作りを意識させる。</p>	
<p>(例) 兵十は、ごんをうったことを後かいしているのでなっとくしていない。ごんは、気付いてもらえたうれしさと、うたれて残念、悲しいという気持ちがまざっていることから、なっとくしているところとしていないところがある。</p>			
<p>7 本時の学習を振り返り、ごんに手紙を書く。</p>		<ul style="list-style-type: none"> ◆ ノートを振り返らせ、二人の登場人物のすれ違う気持ちを再度確認し、結末に対する自分の考えを書かせる。(A, B, C) ◆ 穴埋めのできるワークシートを準備して考えを整理させることで、書きたいことが自分の力で書けるようにする。(A) 	<p>○ 想像した兵十とごんの気持ちを基に、二人がすれ違う結末に対する自分の考えをごんに宛てた手紙に書いている。 [読むこと] (ノート, 発言, 手紙)</p>

☆は育成したい資質・能力に関わる活動 ★は協働学習に関わる活動

6 板書計画

11/29 **ごんぎつね** 新美 南吉

○ **ごん**

- ・ やつと分かってもらえた。
- ・ 神様じゃなくて、自分だと分かってもらえた。
- ・ 「ごん」とよんでくれた。

(うれしい)

○ **兵十**

- ・ 「おや。」兵十は、びっくりして
- ・ 知らなかった どういうことだ 神様じゃなかったのか
- ・ 「ごん、おまえだったのか。いつも、くりをくれたのは。」
- ・ なんてことをしたんだ 力がぬけていく (後かい)
- ・ 兵十は、火なわじゆうをばたりと、取り落とししました。

(さみしい)

○ **ごん**

- ・ もっと早く分かってほしかった。もうおそい。
- ・ 死んでしまったら、もうつぐないができない。
- ・ また、ひとりぼっちの兵十にもどる。

(悲しい)

○ **ごん**

- ・ 兵十は、ごんをうったことを後かいしているのでなっとくしていない。ごんは、気付いてもらえたうれしさと、うたれて残念、悲しいという気持ちがまざっていることから、なっとくしているところとしていないところがある。

○ **ごん**

- ・ 兵十は、ごんをうったことを後かいしているのでなっとくしていない。ごんは、気付いてもらえたうれしさと、うたれて残念、悲しいという気持ちがまざっていることから、なっとくしているところとしていないところがある。